
高校生のリリカル爆走

建宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高校生のリリカル爆走

【Zコード】

Z0284X

【作者名】

建富

【あらすじ】

死因は何だったか・・・そう確か女の子が車に轢かれそうだったから助けた時・・・ではなくそのあとに助けた女の子から全力で拒絶されてフラつと道路に出たらバーンとかだった気がする

プロローグ

一言で言つなら俺は転生者。そして此処は大自然

「なんですか……」

「」との発端は数十年前

「お主は死んだ」

「はいはいはいはい・・・はい?」

田の前の爺さんはそんな言葉から会話を開始した

普通はもつとなんて言つか。せめて初対面なんだし挨拶くらいはしようみたいなさー

「混乱するのも無理はない。が起きてしまったものは仕方ない

「仕方ない。ああ、確かに起きたもんはしゃーない」

「じゅるり~例えそれがワシのマスでも仕方ない」

「やうやう、例えお前のマスでも仕方ない」

「じゃあつじ、んん？！待て！待つんだじゃー言ひたむ事とやつてる
事が！」

俺の脳内ではキチンとやつ処理したのだが体はそつも処理してくれ
なかつたよつだ

俺は無意識の中に爺さんをボロボロにしよつと動いていたら

「つたく最近の若いもんは」

「ねやい、で？あれ？よくある転生系か？」

「つむ、説明が早くて助かるのつ」

確かに若干オタク氣味の俺としてはこのシチュエーションは嬉しい

が！！

シャナ三期を見れない内にポツクリ行くのは思いのほかイライラする

「あと一、二発くらいいは」

「駄目だ決まつておるじやうひ」

「駄目か」

「駄目じゃ」

「今まで書つなら仕方ない

「書くといふ事とやつてこら事が違つへーーー！」

「どうやら俺は余り諦めの良い方では無いいらしげ

「だとあるとアレか。今度は転生特典か

「ナウジや、お買に得じやぞ」

殴つた所が多少腫れている爺さんが何かトランプ的なカードを数枚取り出す

「お買に得ねー」

「ナウジやダヘーの中から好きなカードを選ぶが良い」

「好きなカードねー」

悩むなー・・・ん?これってハズレとかんのかな?それだったら

「マジやだなー

まー転生つてこのシチュコだけど十分アタリなんだろ?」
など

一枚か

「これだー!」

「ちよーお甘ー!」

惱みに惱んでブリッジ体制までして惱んだ結果

俺は全てのカードを駆け込みしていた

「・・・。」

「・・・お主い」

爺さんは俺を残念な物を見るよいつな顔で見る

「うわあ見んなキモイ」

俺は結構強欲らしい

「全部取る奴があるのか？」

「す、好きなのって言つただろー。誰も一枚とは聞いてないー。」

まるで子供の言ご讠話をいつ俺は高校生

「まーあーやうじゅのー」

「み、見るなやー」

「まーいいわい。一いつて言つ忘れたワシのせこせこでもあるようじゅ
し」

心が広い爺さんに心の狭い俺は精神的ダメージをくらひ

「では特典も決まつた事じやし、やつれと送りつかの」

「うといやつ言えば俺は一体何処に飛ばされるんだ?」

「ん? 惑星」

「大雑把過ぎるへー。」

よくある様に足元に穴が開く

がしかし！予想していた俺に避けられない物は無い！

横に軽く跳ぶ

「がそれもまたお決まりの行動じゃよ」

穴があつた

あげくに落ちる瞬間に見えたが最初に開いていた穴の周囲全てが穴だらけだった

用意周到な爺さんに驚き

（で現在）

「惑星・・・か」

ある意味悟りを開きそう俺

惑星って括りは広すぎるだろ？が。・・・まあ森があるんだから生物がいるのは確かなんだろうけど

「お腹すいた

「いは野生的にサバイバルでもしようか

ああ、でも俺。雑草や木の実の知識とか知らんから何が食えるか分かつたもんじゃねえな

「いはそ次に出会った動物を特典能力でブツチして食べるか

またもやお決まりでガサゴソと音がして草むらから何か飛び出す

「よつしゃー！食べ物ゲットオオオーー！」

「た、たべ？！わたしをたべちゃうのぉ？！いやああああーーー！」

草むらから出てきたのは幼女だった

しかもスッゲエ美幼女だった

やつべ、食べる話・・・じしよへ

プロローグ（後書き）

始まりました転生モノ！転生系は初めてですから妙な所もあるでしょうが気長に見てくださいねっ！

一つ一つの文字数は少ないと思います！

では次回！

一話～side 雨水～

前回のあらすじ

俺、お腹減った 草むらから何かが出てきた！ 草むらから美幼女が現れた！ 勢いで食べる発言 美幼女、恐怖 そして現在

「お、おこしくないですかよお」

「へ、うん。ん？いやむしろ美味しそうっ？」

ジユルリ

「ひこー。」

口つっこー・ペダロー！

「まつー！」ぬぐいぬぐい、ちゅうと道に迷ひかけつてー

「まこー! セー?」

「セーフィー、行くあと無しの迷子せんななどだよね。アハハ」

「かえるね! ちなこの?」

美幼女は恐る恐る俺に近付き会話のし易い位置で立ち止まる

食ひ発言はチャラにしてもらひたようです

「無い···かな?」

此処は日本じゃなさそりだし仮に日本でも前の家が存在してるとは限らない。ってかそもそも家があつたとしてそこに俺の居場所は無いかも

···ん?待てよ

いまの俺ってホームレス?

「わたしとおんなじ」

まさかの衝撃発言

こんな美幼女が俺と同じくホームレスとは···危険だ!

「なら一緒に行こう」

男は狼！男は獸！男は・・・んーと。そだ、男はスケベ！よし二拍子揃つた

「いいの？」

「わがりんこー」

「うふあ

「ん？」

「うううああああああんーーー..」

何故か泣き出してしまった。女の子って難しい・・・じゃなくて

「ちよーえ？ーなにー俺悪い事でもしちゃつた？！」

「あう、ふええちがうの。わたし、うれしくて

何だか純粹な子供の心を見ていると・・・真っ黒な大人は酷く傷つくな
「くつーこれは強敵だ、深く抉つてくるぜ

「だ、だいじょうぶですか！いや！しんじゅやあー！」

いや、心の傷ですから肉体的には問題無いです

そんなこんなで美幼女と一緒に旅をする事になりました

「あ、これはたべれますよ」

「ほんと? サンキュー」

「いえ」

美幼女の前に住んでいた家はこの辺らしへこの辺の動植物にはじて
も詳しかつた

ついでながら驚く事に美幼女はファンタジー生物まで持っていた

「キュクルウ」

「ドラゴン（幼態）である

「毎度美味しそうだよな」

「なー、フワードはともだちですー。」

美幼女は俺からフワードを遠ざける

別に本当に食おうとは思つてないの・・・いまは・・・

最初はマジで非常食と考へていた

「それにしても俺達は一体何処を指して歩いているんだが?」

「ああ?わたしもむらからは、でたことありませんでしたから」「ひ

とは言え一定の方向に向かつて歩いていればその内、森脱出は出来るだろ?」

「ギャオオオオ!ー!ー!

「見てない見てない

「つかつか?ー!なんでー!ー!ー

「知らない知らない。俺はあんな表現し難いのを竜とは認めない。リオレウスくらい持つてこいバーカ」

田の前の形容し難い竜種さんは明らかに涎を垂らして俺等を見ている

「ね、ねらわれてせんか？」

「キヤロ、良いか？良い事を教えてやる」

「はい！なんですか！雨水さん！」

初名前登場。美幼女ことキヤロ・ル・ルシエちゃん、俺こと雨水秋春・・・あれ？俺だけ名前でキヤロは俺のこと苗字で呼ぶんだ

「耳を塞げ。目を開じろ。さすれば新たな道がひら

「ひらきません！しぬぎですか？！」

セリフの途中に割り込まれた

「ガウガー！」

「そだ！フリードがいた！」

「むりですって！フリードはまだ」「どもですー！」

そうか・・・なら仕方ない

「逃げよ！」

「さんせいです」

一、二、三

「走れ！…」

「ガグルガアアアアアアアアアアアアアア…！」

「おひてきてますよおおおおおおおお…！…？」

大丈夫。俺等はまだ死なないはず…たぶん…きっと…
だよね？

一話／side 雨水（後書き）

じゃじゃーん！連続投稿！大した意味は無いし書ける内に書こっちゃ
つとけー！的な勢いです！

次回もお楽しみあれ！

「話／side キャロ／

私の村は古くから召喚魔法を継承していた小さな村だった
その村で私は小さい頃から大きな力を持つて、その力を恐怖され追い出された

私は村から出てすぐ「どうじょつかと森を彷徨つている」と雨水さん
に出会った

初めは変な人と思っていたけどとっても良い人で面白い人

「ほんとうにであえてよかつた」

「ちょー！ キヤロ？ そんないまにも死にそうなセリフ吐かないで！」

「？」

私は雨水さんに手を引かれ竜から逃げる

もつと私が召喚魔法を上手く使ってたらこんなのがヘッチャラなのに

「あーそだ！」

「どうしたんですか？！」

「特典があつた！」

「とくでん？」

雨水さんは私を草むらに隠すと鞄と向か合つた

「あらー、おひさしひせー。」

•
•
•
•
○

あれ？

雨水さんは構えた状態でダラダラと冷や汗を流し始める

「使えねえ」

「え？」

「が！ しかし！ そこで諦める俺では無い！」

痺れを切らして竜が雨水さんを襲いそうになつた瞬間、バッ！と手を前に突き出して竜を止める

「なにを」

「良いかー！竜よー。」

「グルウ？」

「！」のお方を誰と心得るー。」

「わたし？ー。」

雨水さんは私を竜の前に突き出すと私を堂々と竜に紹介する

竜は当然此方の言葉は分からないので首を傾げている

「！」のお方は村一番のお偉いさんの娘ー。」

「ちがいます」

「お前も竜の端くれならその意味が分かるだろー。」

「たぶん」とばつりませんよー。」

と思つたのだけど「クッーと竜は振るえ後ずさる

「キヤロの村はお前ら竜の長と代々交流してきた村ー。・。たぶん」

「あ、それあつてます」

「だからお前…もし…この娘を襲おうかのなら…お前ら長が黙つてな

いぞ！」

「あれ？ それだと爾水さんが…・・・」

「え？」

ほり、竜が爾水さんを標準付ナリやつたよ

「あれえ？ なんでえ？」

「わあ？」

「竜…キャロに免じてこの場合は譲り受け…」

「なんでえ？ そりなの…？」

「グルウグルウ・・・ウ？」

竜は少し考ふれる仕草を見せるときを向けて歩を止めた

「よつしゅーー！」

「すうじい？のかな？」

こゝじて私達の危機は去つた

「わー！今日は此処で寝よー」

竜に追われたせいで折角真っ直ぐ行っていた道も分からぬ状態になり夜も遅くなってしまったので洞窟で一晩過ごすことになった

「ふつふーん」

男の人と一緒に

いやいや、そんなの村でもよくあつた。うん、あつたはず。．．
あつたつけ？

「あーそつだー。キャローー」

「ひやーー！」

「なに慌ててんだ？・・・まあ良いけど、奥になんか湯が沸いてたからそこで体でも流してたら？」

「あ、ありがとうございます」

行く？うん、お礼言つた以上は行かない

私は奥に進んでお湯の沸いている小さな湖の淵に来る

後ろを振り返るとギリギリで雨水さんの背中が見える・・・つまり雨水さんからすれば後ろを振り向けば私が見える

「わたしは」「じども」

そつ自分に言い聞かせて服を脱ぐと湯に浸かる

「湯加減どうだー？」

「キュクルウ？」

「あひやへいひゅー！？」

「なに言つているんだ？」

雨水さんがフリードを頭に乗つけた状態で洋服を畳んでおいた辺りに立つて私を見下ろしていた

「溺れてないか不安だったがどうやら足のせべ程度の深さだったみたいだな」

私を心配してくれたらしい

「こじても」

雨水さんは田を凝らして私の体をジックリと見る

「んー」

「なんですか?」

「怪我は無いみたいだ。森の中を走ったから擦り傷くらいは覚悟してたんだが」

「ええ?...そっちですか?...」

女の子としては少しは気を使って欲しかつたです

「?
」

雨水さんが完全に私を子供扱いしている事を肌身に感じました

「話」 side キャロル（後書き）

さつそくチートかもな特典披露？！と思われましたがこの主人公！チートだけど早々楽してチートにでもなる気はありません！

以上！

あ、誤字等ありましたら指摘下せこ

前回の失敗により俺の爺さんから貰つた転生特典が判明した

それは全部で六つ

説明は面倒なので簡略化させてもらひつ

一つ、万物は全て数字で語れり。

これは世界のありとあらゆるモノをステータス化して視覚情報として取り入れれるつぽい

二つ、天は人の下に人を造らず、されど人の上には人を造つた。カリスマ性の向上、良く分からんが生物を纏めるのが上手くなつたらしい

三つ、我が後ろに道が有りけり。

他人に教える事がとても上手くなつたらしい

四つ、全ての事象を観測する者。

よつは単純に物覚えが良くなつたらしい

五つ、若き日の思い出、老い日の勇姿。

何でも年齢操作系の能力らしい、自他ともに可能と

六つ、白紙不明

唯一真っ白のカードで何がしたかつたのかサッパリ。もしかしたらこれはハズレくじの可能性あり

総合的に判断して・・・戦闘に使えそうなのが無かった、と言つた
爺さんのネーミングセンスにビックリだ

厨一病も真っ青な痛々しさ

まあジックリ考えれば使えそんなんだろうけど咄嗟に使えるのは皆
無だった

「うすひさん

さて現実逃避もこれが限界か

幾ら美が付く女の子でも幼女に手を出しちゃ駄目

幾ら隣に寝ているキャロの寝顔がとても可愛くても人間我慢が大切

「クルウ？」

「おひへ、フリードか」

先程からフリードが俺の服を噛んで何かから引き剥がそうとしている

「あふ、あん、ふあ~うすいさん?」

「おはよ、キャロ」

「・・・ちかい」

恐ろしい事に何時の間にかにキャロに抱き着いていた

あれ？？マジでいつから？？

「ハハハ、『めん』『めん』

「・・・。」

色の無い瞳でキャロはジトーっと俺を見つめる

やめーそんな目で美幼女から見られてる何かに目覚めそうー

「まあいいです」

「はあ」

許して貰えたところで朝食

何か食えそうな薬草と木の実。正直肉や魚も欲しいがホームレス生活なのだから文句は言えない

「マズジ

体は正直

「がまんしてくだセー」

「キヤロは平氣なのか?」の味

「えいよウあるんです」

「こや味の話を・・・」

「えいよウがあるんですけどー!」

不味いと思つてゐるんだな

我慢強い子だなー、お兄さん尊敬しちゃう

「早く人の住んでゐ所に出て仕事探さないとなー」

「ですね」

「止まれ！此処は保護観察区域で関係者外は立ち入り禁止領域だぞ！」

何処からか声がした

俺とキャロは周囲を見渡すけど誰もいないので空耳として処理

「疲れてるんだろうか」

「そろそろ起きるひつけいします?」

「キュクル」

その場で休めそつな場所を探し飲み水を取り出す

「つて！貴様等！話を聞け！」

「キャロ、『めん。俺ちょっと寝た方が良いかも』

「わたしもです」

「キュクツー・キュクツー・

ん？どうしたフリード？

上?

・・・上

人が空を飛んでいる、飛びつて言つか浮くだなアレは

「キャロ、あれなに? 知り合いで?」

「かんりきょくのかたでは?」

「管理、局?」

何の管理だろ?!

「ようやくか、でだ、貴様等そこで何をしている

「休憩」

「きゅうけいです」

「キュクルワー」

力チツとスイツチを切り替えるような機械的な音がして視覚情報が
変わる

必要な情報を必要なだけ確認する、でないと表示情報が多過ぎて面倒。全力で見よつと思えば人としての構成情報まで見えてくるお？意外と使える能力の予感！

「あれだな。動物愛護団体の人だ」

「どうぶつ、あい・・・だんたい？」

キヤロには少し難しい単語だったようで途中を省いて発音した

「此処が立ち入り禁止区域と知っているのか」

「知らん」

「へえ～はつみみです」

「キュー？」

「・・・そつか。此処は立ち入り禁止区域なんだ、なので外に出て欲しい」

「案内を頼む！」

なんだかなーと言つた感じで局員の方は此方まで落りてきて道案内

をしてくれた

え？此処って就職出来そうな場所が無いの？

三階～side 雨水（後書き）

およそ1500～2000を田処に書いてます！

にしても特典能力名。我ながら痛々しいネーミングー・アハハ

前回のあらすじ

起床 キヤロ枕の抱き心地が良すぎる キヤロに冷めた目で見られる 何かに目覚めそう 朝食 マズツ 職を探して放浪 人が空から声を掛けってきた 道案内をしてもらつ 此処一帯に就職出来そうな所は無いそうで どしょ？

「で！」

動物愛護団体モグキの人達の所にお世話になる事になった

「う・す・いさん？」

「おつと升を動かさないとな」

「やりますよ」

キヤロに促されて食材を切つていく

俺等の仕事は料理担当

「ん？キヤロは結構手付きが良いねえ、将来は良いお嫁さんになり

やつ

「えつ?...あ、あう、わ、わたしあつむじさん」

「キャロ?...鍋が!」

「え?...あーすみません!」

危うごとにだつたが如何にか間に合ひ難を逃れる
やしだやつぱつとなキャンプみたいな所での定番。カレーを完成
させむ

「たんと畳ひ上がれ!」

「おおつ!...スゲヨな!...お前等!」

「ほんとお美味しぃ!」

ちょいと団体が帰つてきたので配膳を行なう

「やこや、お前等//シドには付いてくるあるのか?」

「...」

「首都だ、首都」

首都かー、それなら就職先は多そうだ

「行く！ 行こう！ 今すぐ！」

「今は行かねえよ。こいつの仕事が終わってからな」

「チツ役立たず」

「なんだとつ？」

一
けんかはだめですよ!!

卷一

何故か俺だけおたまで殴られた

キヤロが団体の女性に囲まれてドンドンと強くなつていいく・・・

「ふう一腹一杯」

「ですねー」

「キュックー」

食事も終わり、今度は食器洗い

「おつ? 何だお前等、仕事熱心だなー」

俺等を道案内してくれた団体のおつかやん

「どうした、おつかやん。」
「何が用か?」

「様子見だ。様子見・・・にしてもお前等、なんか夫婦みたいだな?
兄妹だっけ?」

「ふつー! ふつー! ですか? ...」

「違うぞバカヤロー、俺とキャラコは・・・ん? 旅仲間かな?」

「なんだそりや」

「わ、わたしはふつぶが・・・

え? なんだって?

「そうそう、云々といつと想つたんだが//シルアム四日後に行く予定だからな

「さうか、サンキュおつかやん

「おうー。」

良い奴だな、おっちゃん

一日後

事件が起こった

まあ俺にとつては大した事件でも無かつたはずだし関わらないいつも
りだったのだが

「おらあー！お前ら動くなよ！動くとコイツがどうなつても知らねえ
ぞー！」

「雨水さんー助けてー！」

「黙れー！」

相手はこの辺一帯を荒らす密猟者らしい

愛護団体の皆が追つっていたのだがこのキャンプに入れ偶々居合わ
せたキヤ口を人質に取らてしまつた

「クソツ！」

「チツせめて戦闘に向いた特典があれば」

向こうは武器持ち人質持ち

密猟犯罪組織末端 魔力ランクD 敵意有り 所有魔法はプロテクトとシユーター

・・・組織？

「おっちゃん。もしかしてコイツって仲間とかいる？」

「ああ？！いないはずだが・・・」

「キャロを無事に取り戻す方法か」

戦力的には余裕で勝つているがキャロを櫛にそれでいて以上はそもそも言えない

しかも、もしかしたら近くにアイツの仲間が潜んでるかも

最悪だ

「密猟者ー！聞け！取引があるー。」

「な、なんだー。」

かなりの焦っている。味方が居るならもっと余裕に構えて居そ�だけど居ないのか？捕まりそうだったから切り捨てられたとか

「その子を放せー！うすればお前の条件を何でも一つ叶えてやろう！」

「信じられるかー。」

「ん？だがいまのお前の状況はかなり悪いぞ？逃げるにも此処はお前にとつて敵の本拠地、既に囲まれたようなもんだ。逃げるのはまづもつて不可能」

「・・・へへ、そんなのコイツがいれば」

「ひい

持っていたナイフをキャロの首に突きつける

マジで「アイツ追い詰められてるよ・・・思考も鈍ってるみたいだし交渉がし難い

表情に圧迫感に歎くでいるとおりやさんが何やり俺で合図

「うしろのくせむりにひかませている

成る程、ここのまま俺に犯人の注意を惹きつけて置いて欲しいって事か

「そいつが居れば何だってんだ？」

「あん？」

「もしお前がそいつに危害を加えたら本当に歯止めが切れてお前は終わりだぞ」

「くつ・・・い、いいのか！お前は…コイツに消えない傷が付いても」

「ハッ！別に良いに決まってるんだる、勘違いしてないかお前は俺とそいつは他人で更に言えばそいつは別に此処の自然保護隊の関係者でも無い。この意味分かるよな？」

犯人は苦い顔をするがキャ口は放さない

・・・まだか

「良いんだぜ？ほら、やれよ」

「・・・雨水さん」

「ほ、ほらー良いのか！コイツもお前に助けを求めてるみたいだぜ

「！」

「誰しも求めた結果が手に入る訳じゃねえよ。いまのお前みたいにな」

「な・・・マジかよ。コイツ」

警戒が緩んだ

そう感じた瞬間に犯人のナイフに光の縄みたいなのが幾重にも絡まり取り囲んでいた保護隊の皆で犯人を取り押さえた

これで犯人も捕らえキャロも無傷で取り返す事が出来た・・・だけどキャロはそれから簡易テントに引き篠もつた

四話～side 雨水～（後書き）

主人公は高校生くらいの思考力で考えれる説得で敵に挑みます

なので正直、いやいや相手も色々覚悟してんだしその説得で如何に
かなる訳ねえだろと言つ話が持ち上がりますが・・・まあ追々と説
明するつもりです

五話／side キヤロ

私を助ける為だつたつて事は分かつてゐる

「キヤローーー！」めんつてー！ほんとあんときはアレが最善だつたんだつてーー！」

簡易テントの外で雨水さんが私に謝つてゐる

私を助ける為だつたとは言えあそこまで言われるとは思つてなかつた

雨水さんと私がなんの関わりの無い他人だなんて言つて欲しくなかつた

私達と仲良くしてくれた保護隊の皆と関わり無い同士だなんて言つて欲しくなかつた

「キヤローーーお腹すいてるでしょーー！」飯あるから出でておこでーー！」

更に言ひながら食べ物で女の子を釣るひつとする雨水さんの根性が納得できない

私はそんな食いしん坊ぢやないです

「こつあせんー。」

「え? いりなー? キヤロに食べて欲しくて愛情込めたの?」

「食べますー。」

・・・あ

したり顔の雨水さんがオムレツを持って私の皿に屈んでいた

「ひさひさ、やつぱつキヤロには食べ物だなー。」

馬鹿な私を憎みます

田標のままで行きの日

あれから仲直りをしたとは言え雨水さんも負い田を感じてこのよう
で一つだけ何でも出来る限つのことをしてくれると約束してくれた

「ありしたーー。」

「ありがと! やることましたー!」

「キュクルー！」

「おう！何時でも遊びに来いよ！」

私達は保護隊の皆に別れを告げ、シードで雨水さんの就職先探しの旅を始めた

「これより一局員認定試験を始める！」

「はーーー！」

料理屋。ホテル。一般企業。様々な所を巡ったが私と言つ荷物持つた雨水さんを雇ってくれる所は見付からなかつた

そして私達は保護隊の皆を思い出して局員になつてみようかと考えた

「まずはデバイスの起動！」

「セットアップ！」

「え？デバイス？ああ、さつきのかセットアップ」

私と雨水さんは局員の服装に変わる。たぶんセットアップ時の初期設定なんだと思う

雨水さんは驚いている。そう言えば雨水さんは魔法を見る度に驚いていた・・・あれ?もしかして魔法を知らないんじゃ

「次! 射撃魔法!」

「はいー・シユートー・

「んん? 成る程、やっぱMPが足りませんとか出そうだ。シユートー!

ポスンと音がして雨水さんの魔力弾は消えた。魔力弾の形成に失敗したんだと思う

「・・・次、儀式魔法」

「え? 儀式魔法ですか? !

「はい、小規模でも構いません。これはランクを決めるテストなので」

「はい」

私は詠唱を始める

横田でチラつとだけ雨水さんを見ると何だか壮大な呪文を唱えていた

・・・ただし魔力が全然通つてなかつたけど

その後の色々な事が続く

「以上！終了です！」

結果

雨水さん 魔導師ランクF 非戦闘員 一般局員

私 魔導師ランクC レアスキル持ち 三等陸士

あれ？役職上では雨水さんを超えたやつ

「戦闘外要員つて訳か、まあ別に戦闘したい訳じゃないから良いか。
な、キヤロ二等陸士殿」

「雨水さんのいじわるうー」

敬礼した雨水さんは何だか遠く思えた

私達が管理局入りして早一週間

本当早いな。私の召喚魔法はまだ未完なので戦闘では役立たずだけどデスクワークなら慣れたから結構イケてると思う

「よー・キヤロちゃん！あれ？雨水は？」

同じ部署で仕事をする人達はもつ気軽に私達と話してくれる

「雨水さんですか？や、あさつきお偉いさんと会つて出掛けましたけど」

「お偉いさん？ああ、アイツ情報整理や講師だけは得意だからな

「そなんですよ。雨水さん本人は他人任せ嫌だなーとか言つてしまつたけど

「ハハツ、確かにアイツは教えるのは得意だけど自分はよええからな

「む・・・。」

「お？っとそりゃ睨まんでくれって悪かったってキヤロちゃんの彼氏

は強い強こ

か、彼氏?!

いや私と雨水さんまだそんなんじや。まだ、そつ、まだだよー。

「アツハハハ、ほんとに恋こなキヤロウがほんやアロウヤホンなん
ウチの部署の花だよー。」

雨水さん遅いなあ・・・。今日は一緒に帰れるかな?

五話) side キャロ (後書き)

行き成り訳の分からぬ技術の魔法を使用しろと言われても当然不可能な主人公でした

前回のあらすじ

仕事探索 特に秀でた物の無いので中々受からず 仕方ないので局員になつてみよう 魔力はあつたが魔法は度下手 まあそれでも戦闘だけが仕事では無いので非戦闘要員として採用 デスクワークは初体験（高校生ですから） 中々不慣れだが万物は全て数字で語れり（痛々しいので自分では觀察眼と呼称）を使いロストロギア専門の情報整理担当就任 我が後ろに道が有りけり。（一々痛々しいので講師の才と呼称）が何処かで発揮されていたのか何と無くアドバイスを聞いた偉い人がスカウトしにきた でいまの生活に至る

「たつだいまー！」

現在俺は局の独身寮に住んでいる

まあ節約だわな

「おかえりなさいー！」

「キュックー！」

エプロン姿で出迎えてくれるキャロを見ると何時もながら感激してしまってなる

最近少し背が伸びたらしく幼女扱いは悪いかと思うので今度から
美少女と称そうと思う

とにかくこんな美少女がエプロン姿で出迎えてくれるなんて隣の同
じ独身寮に住む同僚から睡を掛けられそうだ

「料理中だったか?って言うか今日は早いな」

「ん、ちょっと」

キヤロが一瞬だけ暗い顔をしたのを俺は見逃してはいなかつたが今
は放つておこう

美少女の料理が先だ

「あの、すこしだけ話をきいてくれますか?」

「料理が先だ」

「ええ?！」

あ、口に出す言葉じゃなかつた

人間は誘惑に弱い生き物だと信じて疑わない！

「 もう一皿水をさりてばー。」

「 あははー、」めぐらめぐら。キャロの作った飯の匂いが凄い誘惑で

「 はあーなり食べながらでここですから」

「 うそ」

俺が箸を進めるとキャロは俯いた状態でポツリポツリと話しう出す
キャロよ・・・魚の皿玉の部分をそつグリグリとしないでくれ・・・
ちょつとグロー

「 じつは、今田もフコートの竜宮城をしつぱこしかやいまして」

「 ふえーひつはー、ほれはひゅー（くー失敗、それは凄い）」

「 ふざけたまわー。」

「 ふえんふえん（全然）」

「 食べるかしゃべるかどつちかに」

「 ・・・。」

「 番ぬほつにせんねんして下せこ」

え？せっかく食べの方を選んだの？・・・

「へー、かわいい飯がまだ食べながら戻っていったよな？」

「やうだー、雨水さんー、わたしに魔法制御をおしえてくださいー！」

「ふえ？ふあんて？（え？何で？）」

「まだ・・・いい加減にしないと、フリードが火をふきますよー。」

「ん？ー、んぐつ・・・『ホッ、『めん』めん、キャラの』飯が美味しいから」

「なら許します。つまらないですけど」

やつぱり褒められるのは嬉しいのかな？

それからキャラがこれまで悩んでいた事を打つけられる

キャラのあんな泣き顔を見たのはたぶん始めて。俺はそんな急激なシリアルに耐え切れず

「フリードおお」

無言を貫いていたフリードに助けを求めた・・・アツサリ裏切られたけど

なんとフリードは俺とキャロと一緒に見て食事を再開した

「すみ、すみませんー」こんな、めこわくかけるつもつじやなかつた
んじすナビ

「氣にすんなつて」

「きこいってくれてありがとうございます」

「おひ・・・飯、冷めたか。まあ美味にから良じナビ」

「あ、あた、あたためましゅー。」

ん?今更な氣もするし冷えてても美味しいんだけどなー

「噉んだキャロ萌えー」

「フリードせひやつて」

「キユクーーー。」

フリードの口からギャグを通り越した火力の炎が飛び出した

「んがり上手に焼けました？」

最近キヤロの俺に対する扱いが若干乱暴な件を一体何処に相談すべきか考えながら先生と呼ばれるのも慣れた今日この頃

「良いか？キヤロ、そもそもお前のフリード制御ミスは技術面ではなく精神面が弱いせいだ」

「はあ

「でその強化を図りつゝ俺は考えているんだが当然策はある」

「たよりになります！」

「おひー！」

俺は昨夜の内に纏めておいた資料と訓練メニューを渡す

この時の俺は講師の才を完全に舐めていた

六話～side 雨水～（後書き）

原作よりキャラが少し強くなっています

前回のあらすじ

寮帰宅 キヤロ可愛い 美幼女から美少女にランクアップ キヤロ
可愛い 魚の目が放送禁止な感じに キヤロ可愛い 相談を受ける
キヤロ可愛い フリードに焼かれる キヤロかわ・・・ キヤロ
に講師開始 で・・・

「後悔先に立たず」

「あははっ秋春！おもしろーー！」

田の前にはキヤロ似のナイスバディのお姉さんが立っている
この状況を作った原因は俺にある

ほんの些細な事だった

特典能力の一つ。若き日の思い出、老い日の風姿。（年齢操作と呼
称）を試そうと思つただけだ

そして身近な実験台がキヤロだつただけだ

「えと、キヤロ・・・さん？」

「ん？ どうしたの？ 秋春、変な物でも食べた？」

近ッ！ 近い近い

こんな美女に迫られるなんて想像もしなかった

つてかキャロつて成長したらこんなんだ

「なるほど、年齢操作は肉体だけでなく精神も成長させれるのか」

「ん？ と言つか秋春ちょっと若くなつた？」

「お前が年老いたんッ！」

殴られた

しかもグーで

「あ・き・は・るう〜？ 女の子に老けたなんて禁句だよ？」

「ちょーまーなにその魔力パンチ！」

「え？ 秋春が考えたんじゃん・・・ほんとに如何したの？ 今日の秋春変だよ？」

そもそもさつきから呼び方が秋春つて親しくなつてるし

「えつと俺達つてどんな関係だつけ？」

「え？」

笑つていたキャロの顔がどんどんと曇つて涙を流し始める

「じめん…ほんと…話を聞いて…」

泣き止まないキャロに如何にか今までの経緯を説明する

暫らくしてようやく理解出来たのかキャロは納得顔になつた

「あー、それで若いのね・・・ん? だとしたら私にとつて此処は過
去つて事?」

「え? あ、そつか」

「へー秋春にそんなレアスキルがあつたんだ」

「で?俺とキヤロの関係は?」

「それは秘密! だつてそうしないと詰まらないでしょ?」

密着した時に当たった柔らかい感触が何とも言えず顔を赤らめてしまった

「ん？あーー秋春つたら、ふふつそつ言ひとひは一緒だね」

「・・・あ、そう言えればフリードの制御は上手くこなてるか？」

「え？あーあの時の・・・あははっ！安心して！秋春は教えるのは天才的だから！」

「のは？」

と言つ事はやはり俺本人は余り強くはなつてないのか

失言と気付いたキャロはバツと顔を背けてアハハと苦笑い

「さて、そろそろ戻してよ。このままだと色々ウツカリ喋っちゃいそうだから」

「分かつた」

「じゃあね、秋春」

この後のキャロにさつきまでの記憶は無く本当に成長を遂げていた
ようだ

前回の実験で自分の能力がある程度把握し、改めて俺ＴＵＥＥＥが実現できない可能性アップを実感した

「はあー」

「うーす、どした？ 雨水」

「ああ、ヒューズか」

「ハイシハヒューズ。俺と同じく非戦闘要員で同じ部署の同僚

「いやほらキヤロみたいな小さい子までもが戦いの場に出てるのに大の大人の俺らがなーっと」

「ハハツ、そればかりは仕方ないわ。でもお前さんはまだマシだろ
雨水先生！」

「あんまり好きじゃないんだけどな、その役柄

バンバンと強く背中を叩かれ渋々モニターに視線を移す

隣ではヒューズも俺と同じくらいこの速さで仕事をしている

「そいやお前管理局のHースって知ってるか？」

「あ？ 知らん」

「だよなー、お前さん辺境の地の出ででこでこ

「るやー」

「わりいわりい、何でもリンクティ提督が持つてきた若いHースで入りたてで局員をバタバタ薙ぎ倒してゐるらしいぜ」

そりや・・・なんて言つか・・・

「恐ええな

「ハハツだな。俺達には縁の無い話だ」

「ん？ つと時間だ、行ってくる

「外回りか？」

「士官学校に講師だよ

「ガンバ雨水先生！」

つたくこんな年の人間に講師だなんて管理局はよほど人材不足らし
いな・・・つて勤めてみてそれは身に染みる程分かつてるんだけど
な

七話／side 雨水（後書き）

年齢操作は下手に自分に使い若返らせちゃつたりすると転生前に戻つて戻れなくなるので基本他人掛けのスキルになりそうな予感

感想お待ちします！

八話／side キヤロ／

どうも、局勤め一年のキヤロ・ル・ルシエです
何故か私が訓練所を破壊しているといまエースと名高い人の目に付いたそうです

本当に世の中不思議です

「始めてまして」

「は、はじめ！まして！」

「リラックスして。ね？」

「は、はい！」

金色の長い髪の柔らかい笑みをしているこの人。確かフェイド・テ
スター・ラッサ・ハラオウン執務官つて名乗つたはず

なんで執務官なんて偉い人がいまだ三等陸士の私に声を

「えっと確かにキミは週に一回くらいのペースであそこで練習している
よね？」

「え、あ、はい。何時もすみません」

本当に毎日でも行きたいけどあの迷惑看見る田がちよつと悪い
まあ何時も訓練所を滅茶苦茶にしてるんだから迷惑そいつられるのは当たり前だけど

「あ、頑張ってる姿みてたよ」

「ありがとう」

「凄いね、その年で努力家だ」

「いえ、ぜんぜん成長しませんから・・・」

「そんな事ないよ、少しずつだけど確かに成長してる」

この人の言葉は嘘でもないし[冗談でもないと自然と分かる。そんな感じの声色をしていた

何だかタイプは違うけど雨水さん見てこる気分になってきた

雨水さんもこんな風に包み込んでくれるタイプの人だ

「あ、あの、わたしの用があつたんじゃ」

「そうだった」

ポンとうつかりしていたとした仕草は少し天然っぽくて可愛かった

雨水さんには会わせないようにしておこう

「もし、キミがよかつたらで良いんだだけだ……」

「？」

「家族に、なりたいんだ」

「はい？」

「のうとはなんと？」

かぞくになりたい、かぞく、かぞく？ ハニコーの事だよね、うん

「えと、その、あ・・・はい？」

「いめんね、混乱させちゃった」

「い、いえ」

「実は少しキミの事を調べさせてもらったんだけど保護責任者が登録されてなかつたから力になれないかなって」

「ごめんなさい。その理由だとマイチ分かりません、私に保護責任者が居なかつたとして何故貴方がその保護責任者を名乗り出よつと思つたのか

私を手に入れた時のメリットとか無いですよ、家事は得意ですけど

「な、なんで私なんですか？」

「？」

「私いがいにも孤児なんてたくさん」

執務官は少し寂しそうにして笑つた

「ただ、うん、そう。ただ此処で練習をしているキーナが寂しそうだ
つたから・・・それを放つておけるほど私が良く出来てないって感
じかな?ただの血口満足だよ」

此処での私が寂しそう?

それはそうだ・・・だって此処には雨水さんが居ないんだもん

「そ、そだんしてからでも良いですか?」

「やつだん?」

「旅仲間に」

「え?」

今更だけど私と雨水さんの関係を人に教える時、旅仲間くらいしか無いのに気が付いた

私は雨水さんと一緒に住んでいる男性独身寮に帰るとすぐ今日の事を話す

「へーそんな物好きが居たんだな」

「ものぞきですかっ?!」

「うん、ほら子供一人を育てるのって結構大変らしいし」

あれ?もしかして今日の雨水さんはちょっと真面目モード?.

「んーそうか、訓練所の破壊を参考に所が引っ掛かるな。アレか?
誘つて来たのはテロリストか?」

「・・・フリード」

「ちょー止めるフリードー俺は治癒魔法とかは無理なんだ・・・うわああー！」

あんな優しい人をテロリスト扱いなんて信じられません

そんな人はフリードの炎で丸焼きにするべきなんです

「さて、もういいですか？」

「あ、ああ、悪かった。テロリストでも人だもんな、きっと不良が猫を拾う感覺なんだろ？！」

「フリード」

「冗談！冗談だつて！悪かっただつて、ふーん。テスタロッサ執務官つて言えれば近頃噂のエースかヒューズから聞いた」

ヒューズさんから？最近私は雨水さんとは部署が違う場所になつたからヒューズさんとも会つてないな

お菓子とかくれる良い人だつたと思つ

「別に良いんじゃない？キャラが良いつて思つなら

「でも」「せめて行くかもですよ?」

「喧嘩同士だし会える時には会えるだろ・・・それに、今は平氣でも後々保護者が居ないってのは不便だからな」

本当は雨水さんに家族になつて貰いたいけど雨水さんは父親つて感じじゃないですよね

お兄さんは近いかもですけど運で私の方が年上なんじゃと思つ時とかあるし

それに私の目標は雨水さんのお嫁さんですしテスタロッサ執務官の申し出は渡りに船では無いか?

戸籍登録上他人なら結婚年齢になれば可能です

「よし!決めました!」

「おおー、で?如何するんだ?」

「わたし・テスター・サ執務官の子になります!」

「なり今度会つた時に名前で呼ぶ許可を貰うんだな。名前で呼ぶつてのは親しい証だからなキャロ」

「分かりました!雨水さん!」

・・・あれ？私って雨水さんの事は苗字で呼んでもません？

八話／side キヤロ／（後書き）

今更ながら苗字で呼んでいる事に気付くキヤロでした

九話／side フェイト／

キヤロ・ル・ルシエ。私があの子を見掛けたのは一ヶ月くらい前の事だった

あの子は週の終わりに訓練所に顔を出し迷惑そうな大人に何度も頭を下げて場所を借りていた

何でそこまでするのかとても気になつて訓練の様子を少し見せて貰う事にした

あの子の田はとても真剣で何か一つの目標に向かつて走つているような、昔の自分と被るよつた気がしてならなかつた

そして訓練後に見せる寂しい氣な顔がとても印象に残つた

だから私は悪いとは思つてながらあの子の経歴を調べさせて貰つた

小さな村の出身で村を追放された所を自然保護隊に保護されミッドで局員試験を受けて見事合格 現在保護責任者無しの孤児扱い 住んでいる場所は×××部署の男性用独身寮

「？」

何で男性用の独身寮に？

まあ流石に小さい子一人で生活はつて事で多分保護隊の方の多い寮に居るんだろう

私は何度も見掛ける内に声を掛けたくなつた

力になりたいって思った

だから保護責任者を名乗り出した

あの日から一度一週間。多分今日もあの子は訓練の為にやつてくる

「テスター・サ執務官…おはよー!」^{アレコ}ます…」

「おはよー・・・えとキャラット呼んでも良いかな?」

「あ、はい!もちろんです!…・・・そのわたしもフロイト執務官つて呼んでも良いですか?」

「もちろんだよ!」

キャラは嬉しそうに笑うと訓練所の中に入る

そして真剣な顔をして独自の訓練メニューを見ながら訓練を開始する
ん、どんなメニューでしてるんだる?

「え、えとキヤロ?」

「ふえ?...フロイド...じゃなくてフロイド執務官?...」

「それで良いよ」

キヤロのすぐ隣に展開されているモニターのメニューを読んでみる

・・・凄い

かなり考えて作ってある。模範的なメニューじゃなくてキヤロの為だけのメニューって感じ

「これ、キヤロが?」

「い、いえいえ!」これは雨水さんが

「雨水さん?」

何処かで聞いたような

とつでも最近だったような

「前にはなした旅仲間です」

「あー前も思つたけど旅仲間つて?」

「わたしが村をでてすぐに出合ったひと?」

「自然保護隊の人?」

「うん、わたしとおなじで帰るところがないって言つてた」

それからも少し話を聞いていたが段々キャラ口も「あれ?」と首を傾げる事が多かつた

今度会つて見よつかな

「あー…そうだ! フロイトさん!」

「あ、はい、なに?」

「…この間のはなし…」

ドキリと緊張する

もし断られたら如何しよう

「わたしを…フロイトさんの家族にしてください…」

「…良かつたあー」

キヤロは少し安心して気が抜けた私を心配そうな顔で見ている

「だ、だいじょうぶですか？」

「うん、大丈夫、嬉しいくて。ちょっとね」

「よかったです」

今日にでも手続きしないと

あ、それに雨水さんにもやつぱり会わないとな～

キヤロの正式な保護責任者になつたのは申請を通した次の日で実際の所は何か変わった訳ではないので少し現実的な実感には欠けます
だけどいまの私の緊張の度合いは稀に見る度合いです

恐る恐るインター ホンを押す指が震えます

「ふあ～ヒューズか？こんな朝つぱらか！」

キャロの庄さんでこの住所から出てきたのは私と同い年の男性

多分、雨水さんだ！

「あ、あのー始めてー・フロイド・テスター・ララオウンですーー」の度はキャロ・ル・ルシエ夫人の保護責任者にならせて頂きました！

「・・・あん？」

雨水さんは田を締めて田を擦る

そして私の顔をジックリ見ると一田扉を閉めた

「あ
」

もしかして嫌われた？！

そう想っていたが中から何か楽しそうな声が

『キャローなんかお前の母親？いんぞー』

『フロイドさんはお姉さんですー』

『つてか来るなら言えよー何も準備してねえつて！アイツ執務官な

んだから俺つて失礼したらすぐ首飛ぶつて！』

『あははっ！ フェイトさんはそんな事しませんよー』

『嘘だー。』

『・・・フリード』

静かになつた・・・歓迎はされてるよね？

「おはよ〜！ やれこめす！ フェイトさん〜！ いま雨水さん起きたばかりでシャワー浴びてますから入つてゅうべつしてくださこ」

キヤロが笑顔で扉を開けて出でてきた

それは良いんだけど何時もキヤロと一緒に居る、子童のフリードが何か咥えてお風呂場らしき所に連れて行つていたのは見なかつた方が良いのかな？

九話／side フェイト（後書き）

主人公の組織的地位は最下層付近なのでエースで執務官なフェイトには頭が上がらなかつたりします

十話／side 雨水

前回のあらすじ

早朝インターネットで目を覚ます ヒューズと思い込み扉を開けると執務官殿 寝起きの状態なんてかなり失礼な状況で焦る 取り合はずキャロのせいにしてみたらフリードが火を吐いた 次に起きたのは顔面にお湯を掛けられてから 即効身支度整え再度玄関に居ない・・・ ほっとしてリビングに戻ると座っていた

「キャロ・ル・ルシエさんを私に任せて下さー!」

目の前にガチガチに緊張したテスマロッサ執務官が座っています。
どっちが上司なんだか分かつてゐるのか?この人は

「ようはキャロを奪いに来たと・・・ふふつやれるものならやつて
みる」

「ええ?!

「雨水さん。いつたい何時からねてたんですか?」

最近キャロが恐いです

「「ホン、冗談はさておいて。キャロの事は有難う御座います、そして宜しくお願ひします」

「え？あ、」シリシリヤ

「さい、ところで今日などどの様な用件で？」

敬語も出来る高校生なんだぜ！……これであつてるかは知らんが

「あ、いえ、ただ挨拶をと」

「そうですか、それは光榮です。お噂はかねがねですよースさん

「恥ずかしい限りです」

「ところで些細な事ですけど何故キャロを引き取つたっていつつては変ですが変わり者ですね」

いや、マジで訓練所を破壊してゐる所を見掛けでスカウトとかクーデターでも考へてゐるのではと思つても仕方ないよね？

「その、なんて言いますか。放つておけない感じだったので

「なるほど・・・百合な方？」

「なつ！違います！」

「ではキャロは嫌いっと」

「ちがつ！違うよ！違うからね！キャロ！私は大好きだよ？！」

「え？ あ、はい知っています」

「ほほう、やはり執務官殿は幼女好きっと」

何だかこの人、面白い人だな

あわあわと俺とキャロを交互に見るテスタロッサ執務官は割と普通の女の子って感じだった

あ、そう言えばキャロ幼女は撤回してるんだった

あれからテスタロッサ執務官殿とは割と仲良くなつた。あ、フェイ
トって呼べって命令だつたな

キャロはと言つとフロイトさんの所と俺の所をウロチヨロとしている

「死ね！」

「唐突だな」

「お前なんか死んじまえー！」

何時もは冷静情報収集担当のヒューズ三等陸士

なんだか今日は情緒不安定みたいだ

「武装隊の花のテスター・サ執務官とお話なんて死んじまえー。」

「お前も先日話しただろが」

「アレは仕事だ！そしてお前のはプライベート！全然違うー。」

「分かった。お前がフェイトさんのファンと言つ事は何だか凄く分かつた」

メンドクセH

報告ですが、晴れて何かの功績で俺も二等陸士にランクアップ・・・つてこれが一番下位の階級名なんだけれどね

キヤロは一等陸士に昇格してたから結局俺の上面？に当たる位置だし

「こじても気を付けろよ」

「なんだよ、急に真面目に

「ああ、Hリートの周りは危険が付き物だ、キャロちゃんはまだ幼いし正直現場には早い」

「……。」

昔はキャロも同じ部署だったからか心配なようだ

アップダウンの激しい奴だな？

「幾らテスタロッサ執務官が保護責任者になったからってキャロちゃんにとって頼れるのはやっぱ前さんなんだからな」

「るせー。分かつてやー。」

だから俺だって少しばかり訓練してんだろうが……全然成果でねえけどマジで何で他人の指導はこんな上手いのにそれを自分に応用出来ないかなー

あの特典他人限定とかつて縛りでもんのか？

「羨ましいなー！なー！俺と変わねえか？」

「……そうだな、俺がフリードの餌食になっている瞬間だけ変わつてやるよ」

「やつちは遠慮」

ヒューズと暫らく喋っていたら上司に後ろから書類で殴られた・・・
あのハゲエ

十話～side 雨水～（後書き）

今後の参考までに聞いておきたいのですが、オリキャラは増やすべきでしょうか？

お気軽にして意見投票、宜しくお願ひします！

+一話～side 雨水

あらすじ

キャロの保護責任者が正式にフェイトさんに決定 フェイトさんが挨拶に来る なんか素直でからかうと面白い からかい過ぎて次の日首飛んでないか少し不安になる 心が広いのかそんな事はなかつた ヒューズに恨まれる ちょっとシリアス で親睦を深める為に遊びに行く事になった

「うーっす、待ちました?」

「全然待つてないよ」

「おなじくです」

「雨水さんーじょせいを待たせるとは何」とですかー」

「キュックルー！」

フェイトさん、謎の少年、キャロ、フリードの順でお送り致しました

「二人対一人でそんなに待つてないで決定だな

「キュクーー！」

「お前は竜だらうが」

竜の数え方は匹だ！・・・たぶん

「ハハ、それじゃ行こうか」

「ですね、それにしても親睦深める為に遊園地つて子供みたいな発想だな！流石キャロ」

「え？これってたしかフェイイトさんが・・・

ん？

「うひじども・・・かな？」

「フリード」

「キュク」

え？俺なんか悪い事言つた？

流石のキャロもこんな所でフリードに炎を吹かせる事はなかつたが代わりに噛みつかれた

「雨水さんっておもしろいですねー。」

「やうか、まあそれは良かった・・・といひでお前誰よ?」

「え?」

いやいや、そんな悲しそうな顔をむれても俺つてお前から血口紹介もされてねえんだぞ?」

「・・・雨水さん」

女性陣から冷やかな目が

「いやいやー待ってー!俺そいつの名前さえも聞いてない!」

「・・・あ」「」

ようやく知れたがコイツはエリオ・モンティアル。フュイトさんが保護責任者を引き受けた子供らしい

まあキャロ(男v女)ってこといか

「なるほどなー、一応知っていたみたいだか。俺は雨水 秋春な。
わざわざみたいに雨水でも、いつそ秋春でも好きに呼ぶが良い」

「秋春、兄さん？」

「「え？」

「え？」

何故か見詰め合ひつ女性陣とエリオ

え？え？なに？・・・あ、そつ言えば俺を名前で呼ぶのってエリオ
が始めて？

「ジヒシト」「ースターかー久々だなー」

「の、乗るの？雨水さん」

「早そうですね」

「楽しみです！秋兄さん！」

フヒイトさんとキャラ口は恐る恐るか。ま、そんなもんのかな？

つて言うか秋兄さんってちょっと微妙くないか？秋兄か兄さんかどちらかに別けるべきじゃないか？

ジエットコースター

卷之三

卷之三

お化け屋敷

「やつは作りもんだな」

「張りほてですか？」

コーヒー カップ

「そんなに早くない」と思つたが

「回ぬ・回ぬ・回ぬがう・」

ウォータースライダー

「「 キヤ あああ あああああーー..」」

「水ウゼヒ」

「濡れますね」

巨大ボールプール

「「 キヤ あああ あああああーー..」」

「これは叫ぶ所か? ってかボール痛つ。エリオ! テメエか!..」

「アハハ! 楽しいですね!」

カフェテリア

「「 はあはあ、ゴホゴホッ..」」

「お前ら叫びすぎだ」

「だ、大丈夫ですか?..」

カフェの屋外テーブルでくたあーと女性陣一人は倒れている

ん? 叫ぶ様なアトラクションは俺的には最初の一いつくらいだったが

「あ〜く〜、雨水さんってタフですね」

「キャロはともかくフェイトさんまで?」

「エリオは元気だね」

「フェイトさん? 僕もつかれましたけど。楽しかったですから」

昼食が運ばれると俺とエリオは食べるが一人はまだ復活していない
つてかエリオの食べている量が異常だ・・・フェイトさんが払つて
る食事代とか凄そうだな

「あれだな、フェイトさんは良い人だな」

「え? 行き成り如何しました?」

「いや、なんでも」

「いつの時は男が払うべきだと意地を張つてみたがやっぱ凄かった

一ヶ月分の生活費と同じくらいかかったりましたか？

十一話～side 雨水～（後書き）

エリオ登場！

+ 一話～ side ハリオ～

雨水 秋春さん。通称、秋兄さん

今日はフェイトさんもルシエさんも一緒に無く一人同士、男同士で会つ事になった

「うああーだるうー・・・早いな」

ネクタイを緩め眠そうにしながら片手をパタパタ歩いてきた

反対の片手には仕事荷物を持っている

「じめんなさい、急に・・・」

「ん?ああ、いいぞ。待たせて悪いな、その辺の喫茶店で良いだろ
?」

「はい!」

人は居るけどそれ程混んで居ない喫茶店を選びに入る

「あー、で。何の用だっけ?」

「その・・・雨水さんが様々な場所で講師をしていらっしゃるって本当ですか？」

噂に聞いた話では訓練校や難関の士官学校を始め陸士部隊や武装隊の実戦部隊、教導隊のエリート部隊の所まで幅広く活躍していると聞いた

「講師は本当だがエリオが思つてこないような感じじやないぞ？」

「？」

「んーっと、たまゝに呼ばれては優秀な生徒いますか？とかこの子が最近伸び悩んでいるんですけどとか持ち掛けられる程度だ。本職はロストロロギア関係だしな」

つまり生徒を見定める選別眼と的確なアドバイスが出来るって事ですかね？

十分凄いような・・・それで本職は危険物のロストロロギアって・・・

「あ、あの秋兄さんから見て僕ってみこみありますか？」

「見込み？なんの

「まじめのです」

秋兄さんは何だか面倒そうな顔をして右肘を付けて、気分悪くさせてしまったのかな？

「それは、フュイトさんの為とか？」

「それもあります」

「も？」

「はい、僕もルシエさんがんばってる姿を見せてもらいました。そして僕ももっとがんばりたいと思つたし秋兄さんに追い付きたいつて」

「あーあーあー」

楽しそうに首を何度も縦に振つて携帯端末からモニターを表示させた

そこにはこう書いてあつた

ロストロギア鑑定士 魔導師ランクD 雨水 秋春

「くははっ、追い付くつてエリオの魔導師ランクは平均的に見てこ以上は行くし魔力変換資質の電気も持つてゐる。既に追い抜いてるつて」

「え？え？」

あれ？魔力変換資質の事言いましたっけ？

「いやーまー、追い付くつて言つても分野が違うからなー。エリオは戦線部隊になると思うよ？向いてるし、近代ベルカつて事は騎士になるんでしょ？」

「な、なんで、しつてるの？！」

「アハハツ！俺はエリオより複雑なロストロギア相手に鑑定師をしてるんだぜ？大体分かるつて」

やつぱり秋兄さんは凄い

僕の将来の目標には十分な人だ

「ん、意外と美味かつたな。此処のケーキ、キャラに持つて帰るか」

あれから話し込んでしまって夕方になってしまった

「フロイトさんにも買つて行つた方が良いでしょうか？」

「あーそりゃーもちろん。代金は持つてやるからフロイトさんの好

「おつがとうござりますー。」

「わらひなのを選びな

フロイトさんは忙しく僕の住む保護施設に来れる時間を作るのを精一杯、それは分かっていたけど僕は遅くまで起きて持っていた

「フリオー！」

「フロイトさんー。」

面会時間はとうとう過ぎ去り、だなびフロイトさんはやつてへんへん語へ四年の話を元氣良く語った

僕はそれが嬉しくて今田の話を元氣良く語つた

「雨水さんには今度お礼を言わなきゃね

「はーー。」

「あ、ケーキ。ありがとうございます、フリオの選んでくれたの美味しかった

「う

「あ、い、いえ」

いま思つたけどフェイトさんと秋兄さんは何処か似ている
フェイトさんは包み込むように優しく凍った心を暖かく溶かしてくれる

秋兄さんは荒々しくてちょっと乱暴だけど優しく飲み込むように全てを受け入れてくれる

どちらも優しい、信じられない程に優しい、勿体無いほどに優しい

「フェイトさん

「なに?」

「僕、魔道師テストをうけてみます」

だから僕もそんな二人みたいな人になる為に魔導師になりたい

十一話～side ハリオ～（後書き）

現段階の役職　本職　ロストロギア鑑定士
講師

副職　アルバイト

十二話～side 雨水～

前回のあらすじ

エリオに相談を受けた　あれ？俺ってこんな子供により弱いのか
何故か目標にされる ケーキ食つ 意外にも美味しかったからお土
産に持つて帰る キヤロ、ケーキ気に入つた・・・でもカロリーを
気にしてたっぽい 終わり

ああ、何気に既に入局二年くらいか？

今日の仕事は第四陸士訓練校で特別講師を頼まれた

「えー・・・第四陸士訓練校の生徒の皆さん。今日は少しの時間で
すがお願ひします」

あ一面倒だ

広さは一般学校の体育館くらいだろう

生徒達は直立不動、疲れないのだろうか

「魔力と言つるのは確かに多ければ多い方が良いです。がしかし術式
の改良等で同量の魔力である程度魔法の強弱を付ける事が出来ます。
・・なので魔力量が少なくとも強大な魔力持ちに完全に太刀打ち出来
ない訳では無いです」

表示されるのはミッドチルダ式の魔法陣。最近は近代ベルカと言つた新しい形態が出来始めカートリッジシステムも確立された頃で魔法技術の進歩は目覚しい

ちなみに俺の魔法形態はミッド式・・・なんだけど使えるのはせいぜい初步的なを数個

これでも訓練は人並みにしてるんだけどなー

「飛行魔法に必要なのはイメージです。魔力を通すのは部位ではなく体全体です、放出系の魔法に分類されるので飛行中は常に魔力を消費します。しかし覚えればそれは確実に戦闘の際には有利になります」

浮遊だけなら大したモノではないが飛行となると違つてくる

飛行の代わりに別の魔法を代用してくる魔導師も居るらしい。でもそれは大概はレアスキルや先天技術

「と言つたように基本的な魔法とはインテリジェントデバイスが頑張れば自動詠唱出来るレベルです、魔力消費も少なく威力も当然低いです・・・ですがこう言つた基本こそ応用の幅が広く使えます・・・ん?あ、そろそろ時間でした。では今から質問の時間に移りますね」

にしてもこんな弱そうな人間が偉そうに語つてると思つと笑えるなーとか考えていると物凄くイラライラしますと表情で分かる生徒が突っ掛かってきた

「先生の魔力ランクをお尋ねしても？」

「ん？ ひくらいだつたか、たぶんそんくらい」

予想外の低さだつたらじくしきわつきが入る

んー先にある程度の情報を渡してくれれば良かつたのになー

「ひつて・・・つて何でそんな低ランクが、と言つかひつて魔導師として成立するの？ よくテスト受かつたわね」

仕事仕事我慢我慢

「あん？ んだと？ オイ、魔力ランクが魔導師局員としてのレベルを決めるものじゃないつて知つてるか？」

・・・あれ？ 我慢するつもりだつたんだけど

よしー流れに任せて進もう！

「それは教わりましたが限度があります」

「ほほお？限度ねえ、ならお前は俺より強いのか？」

「ええ」

「表に出るー」

「ええーー！」

・・・周りの視線が少しだけ痛かつた

目の前に立つたのはオレンジ髪の少女だった、訓練生にしては珍しく自作デバイス

俺達は勢いのままにリアルに表の訓練場に出た

周りの教師が何も言わないとこ見ると周囲も俺の力を見たかってらしい

「名前を聞こつか？」

「ティアナ・ランスターです」

「先手は譲らうかな」

「そうですかっ！」

開始の合図がなると銃型のデバイスの先が向けられシьюーターが発射される

三発 誘導弾 一発は前から挟み込むように来る圏で一発を背後から
らの本命

観察眼の情報を整理し動きを読む

来る場所さえ分かつていれば速からうが遅からうが一緒だ

それに誘導弾は速さを追及した弾では無い為、感覚的にはドツチボ
ールハード版

「つヒギリギリッ！」

身体能力の高く無い俺としてはかわすのさえ難しい現実的に考えて
かわせる限界は四発くらい・・・あれ？挑発しといてなんだけど、
ヤベ〜

十三話～side 雨水～（後書き）

少しティアナにしては冷静な判断に欠ける行動と思われたかも知れませんがこれには事情がありまして・・・

当初スバルが元気良く勝負を申し込む設定だったのですが戦闘機人に勝てる要素が無い！と気付き急遽身体能力平均並みのティアナに白羽の矢が立つた訳です、はい

なので少し違和感があるかもですがご了承を

十四話～side ティアナ～

最近の私は少し人間関係が面倒で疲れていたのか何時もなら冷静に流せるはずの事を受け止め無駄に起こしてしまっていた

なんでこんな事に

私は割と手加減せずに特別にやつてきた噂の講師にシьюーターを放つていい

「アブナツ！」

講師の方は私の攻撃の位置を何かで先読みしているような動きを見せる

そのせいで段々と私も熱が入る

先読みされているなら全方位射撃で・・・

「うしー！まだ！」

私が同時射撃の為にタメに入った瞬間私に向かって走ってくれる

行動の先読みじゃなくて思考の先読み？

考えない・・・ああ、もう、観客が鬱陶しい

「マルチタスク。あーなるほど思考の先読みと思つたから思考を分割したのか」

歎心したような声を出した。次の瞬間、単発の威力の低いシューターが連續で地面撃ち土煙を発生させられた

目暗まし？

私は標的をズラす為に幻影シルエットを使つ

「シルエットかー、つぐづく訓練生にしては実践に慣れてるなー。いや、実戦を常に想定していたのか？」

なんだかこの講師の言い方は私を見透かしているようでイライラする

「発見」

気付かなつた。講師の人が行き成り日の前に現れデバイスを持つている方の手を捻り上げられる

「痛つ、痛たたつ！痛いです！」

「あははっー！」めんねえー、俺ってバインドまだ未完成でさー

バインドが未完成つてどんだけ魔法下手なのよー！

魔法無しの力では流石に男の講師には勝てない・・・まさか魔法外の手を使つてくるなんて

「うん！魔法戦つて言つてないし良つか！」

「痛い！痛い！いい加減放しなさいって！」

「優等生っぽい顔して酷い言葉使いだな」

段々と手の疲れ力が抜けてデバイスを落としてしまつ

講師の方は私のデバイスを拾つて少し観察するよつて見詰める

「高そうなバーツだなあ」

「返して！かえ、痛たたッ！..」

取り替えそつと振り返らうとしたら余計に腕が捻り痛かつた

「射撃と幻影かー、なんて言つたセンターガードに最適な人材だな

「褒めます?」

「あれだな、キミみたいに可愛い子をこんな風に捕まえると俺が変態みたいだー」

「放さないと叫びます」

パツと放した

瞬間的に魔力弾の形成も考へたが集中力が散漫になつてゐるせいで上手く出来ない

「さて、俺の実力はこの程度だ。そもそも俺は卓上で教えるのであつてこいつは実戦訓練は苦手なんだよ」

勝つておいてそれはムカつく

私より断然に魔法が不得意なのにこれだから才能持ちは・・・
レアスキル

「いーなー才能持ちはつ。俺も魔法使ひてーー!」

「え?」

「ん? どした?」

この後、すぐに訓練校の教師が割り込んできたので話す事が出来なかつた

訓練校から寮まで帰り、最近やたら付き纏つてくるスバル・ナカジマと一緒に帰つている

「どうしたの？今日はティアラしくなかつたけど」

このスバルとは名前で呼ぶくらいには仲良くなつてゐる。一人とも訓練校では珍しい自作デバイスだつたので自然と仲良くなつたんだと思う

「さうでもないわよつ、だつてロランクとか可笑しくない？」

「ま、まあそれは私も思つたけど」

「それにあの講師の人の動き。ちょっと変だつたのよ」

行動の先読みでも思考の先読みでもなかつた

でも最初から攻撃の来る場所が分かっていてかわせる最善の歩数や体制でかわす

いつたいどんなレアスキルなんだらうか

「変つて失礼だな」

「つて！講師の人！」

「なんでこんな所に」

此処つて一応女子寮行きの道なんだけど・・・警備員を呼んだ方が良いのかな？

十四話～side ティアナ（後書き）

今回のティアナの敗因は
威力とコントロール重視でシьюーターの数を減らした事
訓練所が屋外で土煙が発生しやすかつた事
拘束された時にシьюーターから意識を外した事
の計三つくらいかなー?とか思っています

どれも次の機会には克服されてそこで雨水の勝ちがギリギリだった
と言つのを分かってもらえたかなと思います

十五話～side 雨水～

前回のあらすじ

第四陸士訓練校 それっぽい話を 少女に絡まられる 騙し騙し勝つ その後社交辞令的に訓練校教師と話して帰る 道に迷う 見知った少女発見 自分の話と気付く 話し掛ける 警備員を呼ばれた

「つてな訳で道を教えてくれない？」

「……。」「

何故か微妙な表情で見られた

「何であの道を迷つんですか」

今日絡んできた方の少女が呆れたよつに息を吐きながら言つ

隣の子は一応フォローッぽい事を言つてゐるがイマイチフォローとは思えない

「仕方ないだろ?そいや、俺が変つて何処が?」

「私の射撃魔法をかわしていた時ですよ。行動や思考の先読みにしては動きは遅く、かと言つて魔法が放たれている場所は分かつてゐるようにならぬかわす・・・変ですよ、咄嗟に判断したとでも？」

「んー、本当に凄いね、将来は執務官とか希望してるの？」

あの役職は無駄に高いスキルを要求されるからなー

フェイトさんも抜けた性格だけど仕事ではかなり優秀でエリートだつたし

「希望しますが何か？」

「合つてるなつて。えーっとティアナ生徒だったな、そつちは？」

何だか聞いてはいけない感じだったので、すかさず隣の子に話題を振る

「え?え?スバル・ナカジマです!」

「スバル生徒な

元気そうな子だなー・・・と言つたこの子も自作デバイスか。流行つてんのか?

やだなー

自作デバイスって自分で色々魔法組んでる子が多いからメンドクサ
いんだよなマニュアル道理に出来なくて

「雨水先生でしたよね？」

「ああ、でじりでも良いけど帰り道どうひづ？」

「あつちですよ」

今来た道を指された

全くの逆を歩いていたのか、途中に地図等が無いから全然分からなかつた

「ん、ありがと」

「いえ」

「じゃ、今度局であつたら声掛けてなティアナ生徒にスバル生徒」

「だうあー」

「あれえ～？ 雨水さん帰つてたんですね」

「まあーなあー」

自宅でゆつたりと疲れを取つているとキャラロが帰宅する

キャラロはピシッとした局服を着込んでいて肩からショルダーバックを下げていた

どつかの〇しみたいだ

「老けたな」

「・・・フリード

プロテクションを張つてみたがアッサリと破られ丸焼けにされた

そしてフリー^ドは慣れた仕草でグタつとなつた俺を俺の部屋に放つて着替えると言つたげに鳴いた

「あいあい、お前が焼くから服がどんどんと無くなるつての」

「キュック」

「まあな、確かに命令してるのはキャラロだし文句ならキャラロかー」

「キュウウ」

「ああ、少し恐いな」

早々と着替えてリビングに戻ると既にキャロは私服に着替えてソファーに座っていた

「雨水さん、そعدだんがあります」

「相談？」

俺はキャロの畳の前に正座する・・・あれ？普通逆じやね？

真面目な話だと自然と正座で聞いていたりする辺りは教育の賜物と言つ奴なのだろうか

「うん、私、自然保護隊にこいつかと思つんですけど」

「ふーん、いってらっしゃい

「・・・フード

何故に？！

「待て待て！キャロ一話合戦ねー！」

「・・・ですね。そうだんと書つのは、その、あの、雨水さんも一
つじょー、つい」

「え？ なんて？」

「やの、一緒にこできて・・・くれないかな？ つい

「は？ やだよメンディイ」

いまの部署気に入つてるし移動願い出すの面倒だし、何より俺はそ
こまで自然大好き人間ではないので保護と言われても他人事にしか
思えない

「い、いいじゃないですか。恩もありますし返しましょうよ」

「まあ確かに恩返しは大切だよな・・・ん？ フェイトさんには書
いたか？」

「まだです」

そう言つのは保護責任者のフェイトさんに真つ先に書つべきだと想
うんだが何で俺を最初に選んだのか

まだフェイトさんは少し距離があるのかな？

「なり話は今度だな」

「・・・はー」

とは言つてもあのフォイトさんの事だ、キャラの意見を尊重して〇
Kを出すんだうつな

・・・事前準備をしておへべあか

十五話～side 雨水～（後書き）

今更気づいたが原作よりキャラが確りしてきている気が・・・雨水
(反面教師)が居るせいいか?

十六話～side キヤロ～

自然保護隊。名の通り自然を保護し動植物を密猟者等から守る部隊、極地への派遣もあり人気の少ない部隊だけど私は大好き

数日前に雨水さんに一緒に行つてもうえないか相談を持ち掛けたけどアッサリ断られた

・・・むう

「キヤロの好きなよつにすれば良いんじやないかな？」

「フュイトさん」

「雨水さんも口では文句は言つかもだけひきつとキヤロの事を考えてくれるよ」

フュイトさんに相談してみると、とても心強い言葉を頂いた

「でも雨水さんをむりやり連れていくのは・・・」

「雨水さんを自発的に行かせる方法・・・んー私も雨水さんの事は鑑定師と講師をしている事くらいしか知らないもんなあ、なのはなら如何するかな？」

「なのは、たん？」

「あ、私の友達なんだけれどね？説得するのがとても上手なんだ」

それは凄い特技ですね

あのダラけた雨水さんにも効果あるんでしょうか

「あのー！その人に雨水さんの説得を頼めませんか？！」

「ん、んー大丈夫かな？確かに来週くらいにには休みがあるって言つてたし」

「よろしくお願ひしますー！」

私が頭を下げるトロロイトさんは困ったように微笑んで分かつたと一言返してくれた

一週間後、私は雨水さんの休みを高町なのはさんの休みと合わせてもらつてこの間の雨水さんが買っててくれた美味しいケーキのある//シードの喫茶店で合流するよつに取り付けてもらつた

「始めてまして」

「始めてまして高町一尉、武勇伝は私の部署にまで轟いていますよ」

「恥ずかしいです」

「どうやら名前くらいは雨水さんも知っていたようですが

いつも増して表現が硬いのは一応上官だしなーとか考えているに違いない

「フエイトさんは久しぶりですね」

「あ、うん」

「今日は何か話だそうですが、キヤロが何時も迷惑をすみませんね。お一人とも忙しいでしょうに」

「全然！全然そんな事ないよー。キヤロの役に立てて私嬉しいもん！」

「いやはは、私も今日は暇だつたから問題ないよ」

雨水さんはフエイトさんを見て高町さんを見たあとに礼儀正しく上官に対する態度を取つたあとに少し失礼と言つて私を一人の見えない所に連れ出した

「あれは何だ」

「フロイト・テスター・ハラオウン執務官。私の保護責任者でやさしいお姉さんじゃないですか」

「問題はそっちじゃねえ！あの砲撃魔の事を言つてるんだ…もしかして今日会わせたい入つてあの人か？！」

砲撃魔つて女性に失礼ですよ、雨水さん

「そうです」

「ぐっ！キヤ口おー、別に俺は高町一尉が嫌いと言つて訳では無いんだが余りあの人とは関わりたくないんだよ」

「え？なんですか？」

「噂は尾ひれがつき易いもんだけどそれでも、あの高町一尉の噂は他の二人を群抜く」

それから雨水さんは前に生徒から聞いた話を教えてくれた

何でも、高町さんと本局部隊のデモンストレーションの様な模擬戦があつたらしいのだが、そこで高町さんは一人で本局屈指のエリート部隊を圧倒しその場で生徒までをも撒きこみ無双したそうだ

「ま、まさかあ」

高町さんは話では砲撃型、砲撃型はチャージに時間が掛かつたりと
強力な前衛が居て初めて役に立つポジション。そんな一人で無双だ
なんて

「ああ、俺も尾ひれが付いたんだとは思うんだが・・・その、あの
人の魔法センスが異常なのは何と無く分かるんだよ」

「ど、ともあれ！早くもどりますよ！お一人ともまつてますし！」

「やだなー、マジなんで俺なんかが・・・ヒューズラー、今こそお
前の出番だろお？」

何故噂だけで此処まで恐がつているのかは不思議でしたけど呼んで
おいて帰る訳にもいかず雨水さんは渋々戻った

しかし高町さんに笑顔を向けられた時は凄い苦笑いになつてたけど

十六話～side キャロ～（後書き）

満を期して管理局の白い悪魔こと高町なのは登場です！

「ハラクでのなのはさんの戦いを見てるともう常識なにそれ美味しいの？状態ですよ

前回のあらすじ

帰宅 キヤロに明日は会つて欲しい人が居るから時間を空けてくれと言われる 何故前日にと思つたが仕方ない 喫茶店で会つりしいフヒイトさん発見・・・高町なのは一等空尉殿？ つい咄嗟に觀察眼で見てしまい理不尽なくらいな才能を見る キヤロに問い合わせると兎にも角にも話を デーブルに座つたが何故か好意的な目でにこにこと笑顔を向けられる どうしよ・・・お話と称して砲撃を放つと言われている人間とよつてお話とは・・・

「え、えーとそれで誰が俺に用なのかな？」

「私なの」

高町なのは様々！・・・白い悪魔と恐れられた砲撃魔が話し相手かよおおおお！

「なに？文句ある？」

「何も無いです！イエッサー！」

「そう、あのね。一回前にキヤロひやんから聞いてると思ひけどキヤロひやんの為に一緒に自然保護隊に行つてくれないかな？」

きや、キヤロの奴。まさか高町一尉に協力を求めるとは卑劣なツ！

あれが、フリードの炎で焼くのに飽きたから砲撃で来たか。んー詰
んだな

「拒否権はあるんですかね？」

「・・・無い、なの」

田が恐い！何より胸元でキランキラン言つてのデバイスが恐い！

脅迫だ。説得が駄目なら脅迫なんてまさに悪魔だ。と言つた初対面
の人間に脅しを掛けてくるとは

「何だかさつきから雨水さんの視線がとても失礼な」

「べ、別に何も・・・綺麗だなーとか？」

「いやははーそれは嬉しいな」

「・・・雨水さん」

俺は褒め言葉を送ったはずなのに何故かフロイトさんとキヤロから
非難の目で見られた

結果だけ言つと結局俺も一緒に行く事になった

何故か既に異動願い等も提出された事になつており局としての準備は終わつたあとだった

「つたく、面倒な」

「めいわいくでした?」

ミジドの次元転移ポートの様な所で適当に昼食を取りながら愚痴を零す

「迷惑かもなーとか思つなり巻き込むよな」

「だつて雨水さんと一緒によかったですし」

「まー俺も機会があれば自然保護隊の皆にはお礼くらいしないことつて思つてたからこれで良かつたのかも知れんがな」

とは言え俺達が自然保護隊に居るのは約一年くらくなると思つ

理由は俺の講師休暇期間がそれくらいこと言つだけ

「良かったんですよ。これで」

「ふーん」

昼食を終えるとすぐ手続きを済ませて転移する。すねとすねに向かえの人があつてくれた

しかも「一寧に前に俺達を//シテまで案内してくれた、おつりちゃんだつた

「おー！久しぶりだな。お前等、少し背伸びたか？」

「伸びたよ、成長期は過ぎたがまだまだ成長する年頃だからな

「私も少しだけ」

「やうがやうか！キャンプで踏が待つてゐるし、やつせと行くべやー！」

排気ガスを気にしてんのか車では無く徒歩・・・ん？//シテの車は電気自動車じやなかつたか？

んあ・・・単に道が確りしてないからか

「元しても俺等は前回料理しか、してなかつたから何気に自然保護

の仕事とか知らないんだよな」

「そりだなあ、主に保護指定の動物を守つたり金になりそうな動物を捕まえに来た奴を逆に捕まえたりお前等みたいに偶然迷い込む奴をキチンと出口まで案内したり・・・偶に遺跡とかに見付ける奴も居るそうだが」

ホント動物愛護団体みたいな活動だな

俺の特典スキルだと天は人の下に人を造らず、されど人の上には人を造った。（長いので統率力と呼称）か全ての事象を観測する者。（表現し難いのでそれっぽく仮完全記憶能力と呼称）が役に立ちそうだ

「確かにこんな森ばっかりの未開地なら遺跡くらい発見出来そうだ
がな」

「ハハツー」の辺は既に調査済みだ！」

夢を壊しに掛かるなよ

十七話～side 雨水～（後書き）

レイジングハートさんが無言で圧力を掛ける。でした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0284x/>

高校生のリリカル爆走

2011年10月10日08時06分発行